

令和2年度企画展示

今、街の成長を振り返る時

I部 都市桶川の成長を振り返る

かつての桶川は、中山道桶川宿以来の伝統を伝える桶川の町と、雑木林と畑、水田が入り組む台地の農村、そして近代産業を象徴する三井精機工業桶川工場がともにある町でした。

戦後の高度経済成長期を経て、桶川町には新たな住人を迎え、急激に都市開発が進む中で昭和45年の市制施行に至りました。

市制施行から50年の節目を迎える今年、桶川市歴史民俗資料館では、都市桶川の成長の歩みを振り返る機会として今回の展示を企画しました。



〔展示内容〕

- ・ 雑木林から住宅団地へ
- ・ 中山道桶川宿の伝統と祭りの再生
- ・ 現代の街へ — 三井精機工業桶川工場と駅西口開発 —



〔企画展示期間〕

令和2年11月1日から12月20日まで



桶川市歴史民俗資料館

雑木林から住宅団地へ

桶川原風景は、台地の畑と雑木林に谷水田が入り組む農村の姿でした。とくに良質なサツマイモや麦をつくる日出谷地区には、ヤマと呼ばれる手入れの行き届いた雑木林が広がっていました。

昭和30年代の後半になると、首都近郊の住宅開発が進んでいきました。桶川周辺でも、静かな農村の姿に変化が現れます。

日出谷地区の畑や雑木林が切り開かれ、昭和39年(1964)には東観団地、昭和42年には殿山団地と住宅団地の開発が続き、新たな住人が次々と移り住んできました。

「畑一町にヤマ三町」

農家のお年寄りからお聞きした言葉です。「日出谷は赤地で芋がよい」。日出谷地区では、赤土の畑でサツマイモを盛んに生産していました。

春、苗床に種芋を仕込んで初夏に苗を切り出し、畑に植え付けました。苗床で熟成の進んだ落ち葉は良い堆肥となります。秋、これを畑に施して晩秋の麦蒔きに備えたのです。「畑一町にヤマ三町」とは、畑の豊かな実りを広大な雑木林がささえていたことを伝えているのです。



ヤマかき

団地と新しい生活

東観団地への入居をいざなう電車の中吊り広告は、当時の人びとがいだいた明るい新生活への思いを伝えています。庭付き一戸建ての家に暮らすことは、当時の人びとのあこがれだったのです。

未だ、都市基盤の整備が進まぬ当時の桶川において、団地に移り住んだ人びとは、団地自治会を組織して自らの課題に取り組み、新たな街づくりを進めていきました。



移動図書館 むぎぶえ号

当時の団地には、子どもたちの笑顔があふれていました。

東観団地では、母親たちが子どもたちを豊かに育むために、移動図書館を支援するボランティア活動を始め、あおぞら文庫が開かれました。

こうした活動は、他の団地にも広がり、市制施行後の図書館づくりや地域福祉活動などへの市民参加が実現していくのです。

あおぞら文庫のこと

東観団地に越してきたのは、昭和40年。当時、桶川市には図書館がなく、「子どもたちに本を」との思いから、団地内の仲間たちと昭和46年に埼玉県移動図書館「むさしの号」を誘致し、本の貸し出しのお手伝いをはじめました。

子どもたちに、「もっと読書の機会を」と、昭和49年8月に「あおぞら文庫」を開設しました。自分を含め3軒の家の部屋を開放して貸し出しを始め、半年くらい後に、団地のお父さん連中が団地の公園に中古のプレハブを建ててくれましたので、ここに自宅にあった蔵書を移動して貸し出しを引き継ぎました。

活動は全て団地のみんなのボランティアでした。

原木恵美子さん談話



プレハブのあおぞら文庫

遺跡の目覚めと文化財保護

昭和43年(1968)に桶川西小学校の建設予定地の雑木林の下に眠っていた高井遺跡が発見され、遺跡保護のために発掘調査が行われ、縄文時代の人々が暮らした村が姿を現しました。

調査の後、桶川西小学校の敷地内に、住居跡を保存復原しました。

高井遺跡では、都市開発の中で継続的に発掘調査が行われ、農家や団地の人びとがともに参加し、交流の機会ともなりました。



住居跡の発掘風景



復原住居跡(現在は撤去)

中山道桶川宿の伝統と祭りの再生

近代の桶川町は、紅花の取引で栄えた中山道桶川宿の伝統を受け継ぎ、麦の集散地として栄えていました。しかし、戦時中に制定された食糧管理法によって穀物の取引を行う市場を失い、戦後の町勢は一時停滞します。昭和30年代には中山道桶川宿以来の祇園祭も往時の賑わいを失っていました。

昭和40年代に入り、中山道桶川宿以来の桶川祇園祭の伝統を生かし、祭囃子を子供会活動に取り入れることが始まりました。さらに市制施行に前後して、旧町内を単位とする保存会に結集した市民の手によって再生し、現代の都市桶川の活力を象徴する祭りとして成長し続けています。



桶川祇園祭 昭和20年代か



桶川祇園祭と子ども囃子

昭和40年代の初め、桶川町では、子供会活動に祭囃子が取り入れられ、本街のしるぼと子供会と栄町のつばめ子供会が活動を始めました。

当時のことを、子供会の指導者であった千代間啓さん（故人）にお聞きしたところ、ご自身が子供のころ、町内をまわる太鼓車を叩くことが楽しみだったので、いまの子供たちにも祭りの楽しさを教えようとしたとのことでした。

現在の子ども囃子は子供会活動から離れ、各町内の保存会の中で行われています。

子ども囃子を経験した若者は桶川祇園祭を支え、やがて街を担う人材へと成長していったのです。



戦前の太鼓車



子ども囃子の練習



本街保存会の夫婦獅子

桶川宿の獅子舞の伝統は、江戸時代中期にあたる寛延2年（1749）、桶川宿の市神である祇園牛頭天王の祭礼として始まり、麦や紅花の取引による富を背景として、より華やかな町の祭礼として発展していきました。

本街保存会は中山道桶川宿の上中町の伝統を今に伝えています。本街には、安政4年（1857）に作られた大きな一對の獅子頭が伝わっており、昭和57年（1982）にこれを修理し、舞の復活にも取り組みました。以来、夫婦獅子として知られるようになりました。



平成17年の祇園祭では、各町内の神輿の連合渡御をこの夫婦獅子が導きました。その姿は、麦や紅花の出荷を終えた人々が集う中、華やかに着飾った人々が桶川宿を練り歩いたであろう中山道桶川宿の時代を思わせるものでした。

現代の街へ 三井精機工業桶川工場と駅西口開発

昭和15年（1940）に創業を開始した三井精機工業桶川製作所は、近代の桶川を象徴する大規模な工場であり、最盛期には、3000人を超える人びとが働いていました。

三井精機工業桶川工場は、昭和56年に比企郡川島町に移転し、広大な敷地は桶川駅西口開発事業によって都市基盤整備が進められました。住宅団地や商業施設など新たな生活の場が生まれました。

さらには都市公園としての駅西口公園や文化活動の拠点施設である桶川市民ホールが設置され、現代の桶川市を象徴する都市空間が形成されています。

三井精機工業株式会社 桶川工場

三井精機工業は、太平洋戦争開戦直前の昭和15年9月に、桶川駅の西側に15万坪に及ぶ広大な工場用地を得て、桶川製作所建設に着手しました。太平洋戦争中においては、「皇国一八八八工場」として軍需生産を支えました。

戦後、民需転換する中で、昭和22年（1947）から「オリेंट号」の名で発売したオート三輪は、昭和36年の最終モデルまで戦後の三井精機を支えました。その後、日野自動車との関係を深め、桶川工場では小型トラックの生産を受託し、産業用コンプレッサーと併せて工場移転まで操業の柱となっていました。



三井精機工業株式会社桶川工場 昭和40年頃

オリेंट号の開発

続々と従業員が復員してくる中で、鍋や釜ばかり作ってはいられないとオート三輪に取り組むこととなりました。試作車ができ、意気揚々とエンジンをかけたところ、逆走してしまいました。

天沼新平氏（故人）談話



三井精機工業製造 オリेंट BB型 1トン車

社宅の暮らし

若松町は、現在の細田農機から東に向かう水路が町境で、北側は畑が広がっていました。

今の勤労福祉会館のところに「シューレン」と呼ばれた文化クラブがありました。学校が終わると「シューレン行こう」と誘い合って仲良く遊んでいました。

シューレンでのお祭りが楽しい思い出です。オート三輪を改造して鍾馗様を載せた山車を作り、桶川祇園祭の時は、これを引っ張って、工場や寮、町内をまわりました。

野武さん 小幡さん 三浦さん 林さん

駅西口再開発と市民文化の拠点



昭和56年（1981）に三井精機工業桶川工場が川島町に移転した後、駅西口の若宮地区は再開発によって一変します。

昭和57年11月には橋上駅舎が完成し、昭和63年パトリア桶川店（通称おけがわメイン）が開業します。その4階には桶川市民が待望した図書館（駅西口図書館）が開館しました。

その後、駅西口公園の隣接地に県立さいたま文学館及び桶川市民ホール「響の森」が建設され、平成9年（1997）に開館します。こうして、桶川市民による芸術文化活動を支える都市環境が整っていきました。

さいたま文学館と桶川市民ホールは、当初から連携して事業を行うことを目指し、桶川市民劇団シアター-DACが平成8年に結成されました。

平成27年（2015）10月1日にパトリア桶川は新装開店します。同時にリニューアルした駅西口図書館は、桶川中央図書館と改称し、同じフロアの丸善書店と共用する「OKEGAWA honプラス+」ともに、市民の情報拠点となりました。



—協力者—

小幡洋子 野武和美 林 保次 三浦瑠子 星野光雄 松本 功 原木恵美子
吉川國男 倉林詢一 田谷朋一 塩川幸子 殿山団地自治会

[順不同 敬称略]

令和2年11月1日 桶川市歴史民俗資料館 館長 粒良紀夫（文責）